
ソシュールの翻訳と解釈

——時枝誠記による『一般言語学講義』批判をめぐる予備的考察——

松澤和宏

〈名古屋大学〉

何の変哲もない一片の化石が、その裡に気の遠くなるような時を秘めているように、テキストが私たちの前に読解の対象として姿を現すまでには、しばしば思いもかけぬ紆余曲折を経ている。20世紀の言語学の礎石として、あるいは現代思想の原点として高く評価されている『一般言語学講義』¹（以下『講義』と略す）（1916年）は、フェルディナン・ド・ソシュールの名が冠せられているものの、彼の著作ではない。1913年3月にソシュールが亡くなると間もなく、弟子のセシュエは、ソシュール晩年の第三回一般言語学講義（1910-1911）に出席した3人の学生の聴講ノートに基づいて、コラシオンと呼ばれる下書きに着手した。その年の12月末にはこのコラシオンの執筆を終えている。翌年からはパイイが加わって、第一回講義（1907）や第二回講義（1908-1909）の聴講ノートおよびソシュールの自筆草稿の一部を参照し加味しながら、コラシオンに手が加えられ、『講義』初版の序文によれば、「いっそう大胆ではあるが、いっそう合理的であると思われる解決」、すなわち「第三回講義を土台」とした全面的な「再創造」を試みたのである²。したがって、パイイとセシュエこそが『講義』の文字通りの編著者なのである。

さて、『講義』は小林英夫によって1928年に『言語学原論』（岡書店）という邦題で日本語に翻訳され、我が国の言語学にも今日にいたるまで広汎な影響を及ぼすことになった。時枝誠記が『国語学原論』³（1941年）において言語過程説の立場からソシュールの学説を厳しく批判したことは夙に知られている。時枝による『講義』批判は、服部四郎など幾人かの言語学者との論争を生んだが、けっして無稽の議論ではなく、今日なお検討に値するものと思われる。

さて、時枝によるソシュール批判を今日論じるためには、次の点に注意を払わなければならないだろう。第一に、時枝がソシュールを批判する際に全面的に依拠している『講義』が、そもそもソシュール自身の考えを必ずしも正確に伝えているとは言えないということである。言い換えれば、時枝の批判の対象が、ソシュールではなく、あくまでも『講義』であったことに留意しておきたい。第二に、小林英夫による『講義』の日本語訳の細部にも種々様々な問題があることである。したがって、時枝誠記による『講義』批判は、ソシュールの原資料——パイイ・セシュエ編著『講義』——小林英夫訳『講義』——時枝誠記の言語過程説、という四項の複雑な関係をつねに押さえながら検討されなければならないのである。

以下に読まれるものは、時枝による『講義』批判をソシュールの側から捉え返していくための予備的な考察である。

-
- 1 本稿においては、引用はFerdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Sechehaye, édition critique préparée par Tullio De Mauro, 1983に拠り、頁数を引用の後に記した。引用はソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳、岩波書店、1972年に拠り、頁数を引用の終わりに記した。
 - 2 『講義』の成立過程については、松澤和宏「ソシュールと『一般言語学講義』の間」（『生成論の探究——テキスト・草稿・エクリチュール』所収、名古屋大学出版会、2003年）を参照していただければありがたい。
 - 3 引用は、時枝誠記『国語学原論』上、岩波文庫、2007年に拠り、頁数を引用の後に記した。

1. 時枝誠記によるソシュール批判

時枝の基本的な立場は『国語学原論』の「序」の以下の一節に端的に示されている。

私は、言語の本質を、主体的な表現過程の一の形式であるとする考に到達したのである。言語を表現過程の一形式であるとする言語本質観の理論を、ここに言語過程説と名付けるならば、言語過程説は、言語を以て音声と意味との結合であるとする構成主義的言語観或は言語を主体を離れた客体的存在とする言語実体観に対立するものであって、言語は、思想内容を音声或いは文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体であるとするのである。(13頁)

時枝の言語過程説の要諦は、音声や文字を媒介とした表現と理解という活動の過程そのものを言語と見なす〈主体的立場〉にある。時枝はこの立場から、「第一篇総論 六 フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure の言語理論に対する批判」において、ソシュールのラング概念を標的にして、批判の矢を放っている。混質的な対象に「単一単位を求めようとする彼の態度には、明らかに、科学の出発点は単位の認識から始められねばならないという考」があり、そこに「自然科学的な原子的構成観」があるとして、そうした、

単位的要素こそ言語研究の真の対象であるとし、それを「^{ラング}言語」と名付けた。「言語」は聴覚映像と概念との結合という純心理的実体として認められたものではあるが、それは何等言語主体との交渉にない社会的事実としての存在であって、その存在形式は全く物的対象と異なる処のないものである。(102頁)

時枝にとっては、真の「言語」とは、あくまでも主体的な表現と理解の活動以外のなにものでもなく、主体の外側にあるラングではない。こうして言語学の対象は、ラングではなく、主体の「言語活動」そのものになってしまう。これはソシュールの用語ではラング・ジュ langage、小林訳では「言語活動」にほぼ相当する。時枝の言語の主体的過程とは、表現の場合には、

素材としての具体的事物（ないしは表象）→ 概念 → 聴覚映像 → 音声（→文字）

というプロセスとなり、理解の場合には逆の過程を辿ることになる。問題は、時枝の想定する主体的活動の過程には、ソシュールがラングと呼んだ言語規範が介在する余地がほとんどないことであろう。唯一現実的なものとは、こうした主体的活動以外にはなく、ソシュールのラングは、「話手の機能を除外した処の存在」(85頁)、すなわち主体の外側にある抽象物であり、観察的立場の所産に過ぎないと時枝の眼には映っていた。時枝説の眼目は、聴覚映像と概念との結合を対象的に客体化して取り上げるのではなく、表現主体の側から過程的にとらえることにある。概念と聴覚映像とを結びつける心的作用は他の諸記号との差異によって規定され、そうした諸々の差異の体系としてラングが想定されるというソシュールの理路は、そうした作用が個人的主体の内部に局限されてしまうことで閉ざされている。

2. 『講義』の末尾の一文をめぐって

では、言語過程説からのこうした批判をソシュールの側から捉え返すとどうなるのだろうか。ここではソシュールにおけるラングや心的実在や単位といった一連の基本概念を取り上げて全面的に論じる余裕はないので、時枝の批判の標的になっている『講義』の幾つかの箇所を取り上げて、ソシュール文献学の見地から検討し、それを通じてラング概念をめぐるソシュール解釈の問題点の一つを明らかにすることに留めたい。

よく知られているように、『講義』は、言語学の対象は^{ラング}言語であるという高らかな宣言を以て閉じられている。末尾の有名な一文のフランス語原文と小林訳を引用しよう。

La linguistique a pour unique et véritable objet la langue envisagée en elle-même et pour elle-même. (p. 317, エングラー版断章番号3281)

言語学の独自・真正の対象はそれじたいとしての・それじたいのための言語である。(小林訳『講義』327頁)

時枝説を支持する者も自称ソシュール派もともに、『講義』のこの「結論」がソシュール言語学の基本的な性格を端的に要約しているものと久しきにわたって受け取ってきた。言語学が「言語」を対象とするのは、至極当たり前の話である。だが、その場合の「言語」とは一体何を指しているのだろうか。この訳文に関して、uniqueは「唯一」とむしろ訳すべきであるとの的確な指摘がすでにある⁴。だが、それにもまして問題であると思われるのは、「言語」がla langueの訳語であるということである。因みに小林訳では、langageは「言語活動」、paroleは「言」とそれぞれ訳出されている。ソシュールは自筆草稿ではしばしば「言語の科学」la science du langageという表現を用いている。このことは、ソシュールが言語学の対象をlangageと考えていたのではないか、という解釈に誘わずにはおかない。このランゲージュこそ言語現象全般を指す総称であり、したがって「言語」とむしろ訳されるべきであり、定冠詞を伴ったラングla langueとは、パロールとの対比においては、社会的性格をもった言語規範、言語体系あるいは共通語の意味で用いられていることは、周知の事柄に属しよう。『講義』の末尾の一文は、言語規範ないしは言語体系としてのラングの言語学を唱道している。言い換えれば、種々雑多な言語現象の背後に潜む法則をラングとして解明する科学として言語学を明白に規定したわけで、まさにこの故に『講義』は20世紀の言語学の原点として高く評価されてきたと言える。

ところが、この一文は、ソシュールの自筆草稿や学生の聴講ノートのどこにも見あたらず、『講義』の編著者による純然たる加筆であることがゴデルの労作⁵やエングラー版⁶などによって判明している。しかしながら、そうした文献学的観点からの確認から、この「結論」がソシュールの考えを裏切っていると直ちに断定するのは早計の誹りを免れないであろう。果たしてソシュールはラングの言語学を特権化していたのだろうか。

3. 第三回講義と『講義』の差異

ラングとパロールをめぐっては自筆草稿などにも、その理論的素描が読まれるのだが、ここではソシュールが本来の言語学の対象をラングに限定していたのかどうかということに焦点を絞って、第三回講義と『講義』を比較検討することにしたい。既に触れたように、『講義』は、1910年10月28日に始まったこの第三回一般言語学講義を土台にしている。第三回講義の二回目の講義(11月4日)で、ソシュールは第三回講義の全体の構成を、以下のように学生に提示している。

- I 諸言語 les langues
- II ラング la langue
- III 諸個人における言語 langage の能力と行使⁷

ソシュールが病に斃れたために、「諸個人における言語 langage の能力と行使」と題された第III部の講義

4 大橋保夫「ソシュールと日本」下、『みすず』167号、1973年、13頁。

5 Robert Godel, *Les sources manuscrites de Cours de linguistique générale de Ferdinand de Saussure*. Genève, Droz, 1957.

6 *Cours de linguistique générale*, édition critique par R. Engler, tome I, Wiesbaden, Harrassowitz, 1968.

7 « Documents : Le troisième cours de Linguistique générale », *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 58, 2005, Droz, p. 86.

は残念ながら実現しなかったが、この第Ⅲ部でソシュールがパロールを論じる予定であったことは疑う余地がない。『講義』の編著者は予定されていた第Ⅲ部を完全に無視して、ラングを論じた第Ⅱ部をもっぱら特権化する形で、以下のように編纂した。すなわち、

- 序説
- 第Ⅰ編 一般原理
- 第Ⅱ編 共時言語学
- 第Ⅲ編 通時言語学
- 第Ⅳ編 言語地理学
- 第Ⅴ編 回顧言語学の諸問題 結論

第三回講義の第Ⅰ部で扱われた「諸言語」は、『講義』では第Ⅳ編言語地理学に追いやられてしまい、パロールは「序説」でごく簡単に否定的に言及されるに過ぎない。その代わりに、序説で言語学はラングを対象とする旨述べられた後、第Ⅰ編において記号の恣意性を「第一原理」とする「一般原理」から出発するいわば演繹的な秩序が導入されることになった。こうした『講義』の体系をはたしてソシュール自身が考えていたかどうかは、「諸言語」から始まり、ラングを経て、パロールを論じる予定であった第三回講義の構成を考慮に入れるならば、極めて疑わしいと言わざるを得ないであろう。

ここでは第三回講義の第Ⅱ部（5月19日）の講義の最も精細なコンスタンタンの聴講ノートからラングの言語学に関する箇所を引用しておこう。

ラングとパロールという二つの対象は、相互に前提し合い、一方なしには他方も存在しえないのが本当であるにしても、両者は性質が異なっているので、それぞれ別の理論を求めると、私たちは結論する。（コンスタンタンのノート、p. 308b、エングラール版断章番号342）

二つの途を同時に進むことはできない。二つを別々にして進んでいくか一つを選ばなければならない。既に述べたように、我々としてはラングの研究を推し進めていく。言語学の名称は、二つの事柄を合わせたものに対して保持しておくのか、それともラングの研究にそれをとっておくのか？ 私たちはラングの言語学とパロールの言語学とを識別することができる。

こう言ったからといって、ラングの言語学においてはパロールの言語学を一瞥してはならないと結論してはならない。（それは有益であるかもしれない。しかしそれは隣接領域からの借用である。）（コンスタンタンのノート、p. 308c-309、エングラール版断章番号367, 370）

第三回講義の以上の箇所を参照して執筆された『講義』の箇所は、「序説」の「第4章 言語の言語学と言の言語学」の次の箇所である。

むろんこの二つの対象はかたくあい結ばれ、たがいに他を予想する。（小林訳『講義』32頁）

しだいによっては、これら二つの学科のそれぞれに、言語学の名前を据えおき、言の言語学といっていえないこともない。しかしこれと、言語をその独自の対象とするほんらいの言語学とを、混同してはならないであろう。

われわれはもっぱらこの後者に専念するであろう。そしてもし、論証の途すがら、言の研究から照明を借りることがあるとしても、二つの領域をわかち境界を、断じて消さぬよう、努力するつもりである。（小林訳『講義』34頁）

『講義』では、本来の言語学は、あくまでも「言語」=ラングの言語学であるとされているのに対して、第三回講義のコンスタンタンのノートには、そのような文言は見あたらない。編著者が直接参照したデガリエとセシュエ夫人のノートにもやはり存在しないので、本来の言語学とはラングの言語学であるとする『講義』の定式は、編著者の加筆であったことが判明する。つまり、既に見た末尾の一文の場合とまったく同じ事情が窺えるのである。ソシュールはラングの言語学とパロールの言語学という二つの言語学を識別できると述べているのに対して、『講義』の編著者は終始一貫してラングの言語学を特権化し、パロールの言語学を「ほんらいの言語学」から排除したことが明らかになる。

しかしながら、ソシュールが「我々としてはラングの研究を推し進めていく」というように、ラングの言語学を選んでいる点は、どのように解釈すべきなのであるか？ この問いに答えるためには、この箇所が語られた文脈を考慮せざるをえなくなってくる。第三回講義でラングの言語学とパロールの言語学の識別に言及していた箇所は、第Ⅱ部であることに留意しておきたい。5月19日の講義は、「第1章 ランガージュから切り離されたラング」に立ち戻り、ラングとパロールの分岐を明確に導入し、新たな「第2章 記号の体系としてのラング」に橋渡しをする場面である。したがって、そこでラングの言語学が選択されるのは、講義の流れとして当然であろう。それがパロールの言語学を研究対象から排除することをいささかも意味しないことは言うまでもない。

コンスタンタンのノートと『講義』の本文を比べて気づくことは、ソシュールの講義には、一方ではラングとパロールを区別する方向を示しながら、他方では双方の相互依存的な関係を強調する、という相反する挙措が潜んでいることである。ところが『講義』では、両者はあくまでも分離され、ラングの言語学が顕揚されるべきものとして強調されていて、相互依存性は自明であり、取るに足りぬ些事であるかのように処理されているのである。

4. 二項対立と二重性

時枝の誤解した点の一つは、ソシュールがラングをアプリオリなものと考えていたわけではなく、歴史の中で形成され、したがって変容していくアポストエリオリなものと考えていたという点に関わる。

おそらく、ラングはそれ自体パロールからしか、ある意味では、出てこない。ラングの由来する合意が成立するためには、幾千もの個人のパロールが必要である。ラングは最初の現象ではない。(第三回講義、コンスタンタンのノート、p. 274、エングラール版断章番号345, 346)

『講義』もほぼ同じような内容となっはいるが、聴講ノートにはない以下の文言を結論のように加筆している。

それゆえラングとパロールは相互依存関係にある。後者（パロール）は前者（ラング）の道具であり、同時にその所産である。とはいえ、これらすべては両者が絶対的に別のものであることを妨げるものではない。⁸（『講義』33頁）

重要な点は、この一節全体が編著者の加筆であり、ラングとパロールが「絶対的に別のものである」ことが結論とされていることである。ソシュールは、「ラングとは社会的産物であるが、その存在が個人に言語の能力と行使とを可能にしている」と規定したうえで、一方ではラングはパロールからしか出てこないと述べ、他方ではラングは本質的な部分であり、「唯一の本質的な事実としてのラングからまさしく出発しな

8 小林訳では、「前者」と「後者」を取り違えており、誤訳となっている。

ればならない」(コンスタンタンのノート、p. 219) と述べている。『講義』はこの二重性を二項対立に解消してしまったために、ラングとパロールとの関連が断たれてしまい、時枝の目に、ラングが主体にとってまったく外的な抽象物に映じた一因となったとも考えられる。

第三回講義の最中の1911年5月6日にソシュールは学生の一人に以下のように打ち明けていた。

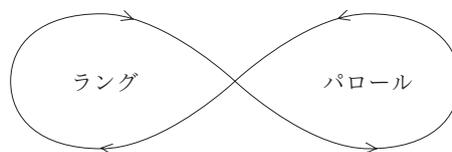
私はジレンマの前に立たされているのです。扱っている主題をその複雑さにおいて提示するか、それでは試験の素材とならなければならない講義には適しません。あるいはなにか単純化されたこと、言語学者ではない学生の聴講にもっとふさわしいことをなにかするかです。⁹

ソシュールが主題の複雑さと述べていたものの一面は、まさにここで問題としている言語の二重性ではないだろうか。ジュネーヴ大学の学生相手の講義であるがゆえの制約や教育的配慮が働いていたと解釈できるだろう。第三回講義を評価するうえでは、ラングの言語学とパロールの言語学への分岐は、最も微妙で困難な箇所である。両者は確かに別なものであるが、しかしながら常に一方は他方を想定しなければ成立できない相依相関という関係にあり、二項対立を形成しつつも、還元不可能な二重性を保持しているからである。

『講義』が消し去ろうとしたことは、このラングとパロールとの相互媒介的な根源的二重性である。バンヴェニストの「ソシュール没後半世紀」という講演の次の一節ほどこの二重性に真に迫った考察はなかったと言えよう。

ソシュールが、既成のすべての概念を一掃した上で樹立している対象とは一体何であるのでしょうか。私たちは、ここでソシュール学説における本源的なもの、言語に対する一直観を措定する原理に触れているのです。この原理とは、言語は、いかなる観点から研究しようとも、常に、一方が他方によってのみ価値のある二つの部分から成る二重の対象 un objet double である、ということです。¹⁰

バンヴェニストの慧眼の光る一節である。この二重性とは、一方が他方なしでは存在できず、常に相依相関のなかにあるということである。いかなるラングもパロールを媒介にしてしか成立しえず、またパロールもいかに個性的で一回性を刻印されていたとしても、ラングのもつ社会性、一般性を完全に払拭することは到底不可能なのである。このことは、ラングというものが、パロールと同様に、所与として与えられていないということであり、言語学のメタ言語もまた自然言語と同様に差異の体系としてしか存在しえない、ということを示唆している。これを図示すれば、以下のようなになるだろう。



言葉の運動は常に双方からの磁力を蒙り、∞の軌跡を描きながら、けっして一方の極に収斂することのない二重性を維持しているのである。ラングそのもののような紋切り型の表現も常に一回性や個別性を孕んでおり、いかに斬新な表現も手垢にまみれた既成のラングと無縁ではありえない。一方の極に還元しようとするほど、言葉は必ず他方の極から受けている磁力を露わにしてくるのである。したがって、例えばラングを潜在性として捉え、それが顕在化してパロールとして自己実現するなどというような現代思想風の捉

9 Godel, *op.cit.*, p. 30.

10 Emile Benveniste, *Problème de linguistique générale*, I, Gallimard, 1966, p. 40. この二重性に着目した論考として、野村英夫「ソシュールの解釈について」(『文学』36巻2号、1968年、岩波書店)がある。なお、1996年にジュネーヴのソシュール邸で発見されたソシュールの自筆草稿の一部は「言語の二重の本質について」と題されていたことが、ここで思い起こされる。

え方は、ラングをいつの間にか実体化し主体化してしまう弊を免れてはいない。『講義』では、二つのものに分離されたラングとパロールは、それぞれ独立自存する辞項として二項対立を形成することになった。『講義』の編著者は、根源的な二重性 *dualité* を解体して二項対立 *binarisme* の関係に歪曲してしまったのである。

時枝が批判したラングとは、『講義』の編著者によってこの根源的二重性が解体され、二項対立に還元された末の一辞項に過ぎず、したがってソシュールのラングの残骸であったと言ってもけっして過言ではないのである。時枝のソシュール批判を文献学の観点から検討することを通して、言語過程説において概念と聴覚映像を結びつける箇所に本来働いている筈のラングの不在が浮き彫りになると同時に、『講義』が遮蔽した言語の二重性が、まさに否定的に浮かび上がってくるのである。